

企画展 (開催中)

「秋山鐵夫の絵と詩で紡ぐ癒しの空間」

8月2日(土)～11月3日(月)



8月2日(土)から、企画展「秋山鐵夫の絵と詩で紡ぐ癒しの空間」が始まっています。

浜松市在住の画家「秋山鐵夫氏」の作品展です。

秋山氏は、静岡大学定年退官後、初めて油絵に挑み、温もりとユーモアに溢れた画と詩文を発表してきました。現在までに、『黒岳のふくろう』『時のすきま』という2冊の詩画集を出版し、銀座や浜松市内の画廊で4回の個展を行っています。

今回は、詩画集に掲載された作品も含め、40点余の画と詩文、随筆等を展示しました。

緑に囲まれた文芸館の、静かな展示室の中で、秋山氏の作品のもつ優しさと温もりを感じながら、「癒しの空間」を味わっていただけたらと思います。

文芸館講座の一コマ (子どものための夏休み講座から)



「夏休み絵本づくり講座」・「10歳からの少年少女俳句入門講座」・「夏休み額縁を作ろう講座」

文芸館の四季

文芸館を囲む木立の中に、たくさんの台湾リスがいます。

木々の間を枝から枝へ飛び移ったり、フェンスの上を伝って行ったりと、あちこちで姿を見ることができます。時々、セミや小鳥の鳴き声に交じって、台湾リスの独特の鳴き声も聞こえてきます。

先日、来館者の方から、「電線の上を綱渡りしているリスを見たよ。」と報告をいただきました。

暑さに負けず、リスたちは活発に活動しています。



<木立の中で・・・>

浜松文学紀行

井上靖と浜松 3

体操教師花井楊五郎

大正10年(1921)4月、靖は県立浜松中学校(現浜松北高)に首席で入学した。本人はもちろん両親にとってもまったく予想外のことだった。

靖入学時の浜松中学校は一学級45名、学年4クラスで定員が800名だった。教職員は37名。校長は、在職一年半35歳の佐藤礼云だった。5回の卒業生を出し、県西部の伝統校としての地位を着実に築きつつある一方、ストライキの多い学校として全国的に有名だった。佐藤校長は、ストライキをなくし学校の秩序を正すことを学校経営の最重要課題としていた。そうした時に靖は入学し、一組の級長に任じられたのである。

四月一日の入学式の日、私は新調の黒の小倉の服を着、帽子をかぶり、靴を履いて登校した。新入生は朝礼の時、老いた体操の教師に依って整列する順を決められた。身長之最も高いものが最右翼に置かれ、それからあとは背の順で次々と並ばされた。

私は初め列の中頃に並んでいたが、体操の教師は私に目を当てると、「その帽子はずっと下がって」と言った。どっと笑声が起った。(略)彼は視線を私の頭から足元に移し、あとはじっと私の足元を見降ろしていたが、「その靴はこんど買ったのか」と言った。

「そうです」

「大きな靴買ったもんだな。——体操ができるかな、それで」

こんどは体操の教師の言葉にはからかいの口調はなかった。(略)それから多少しみじみした口調で歩いてみなさいと言った。私は命じられた通りに列外へ出て、歩調をとって四、五歩歩いてみせた。この時もまた笑声が私を包んだ。(略)私は笑声を浴びながらも、昂然としていた。(「帽子」)

靖は、どんなことがあっても「大きな帽子と靴を買ったことを母の落ち度にはすまい」と決意していた。

体操教師の花井楊五郎は、厳しいことで全生徒から恐れられていた。その花井先生に中学入学初日から、靖は目を付けられてしまったわけである。しかも級長だったから、体操の授業では毎回大声で号令をかけねばならなかった。小柄で「チビ級」とあだ名された靖は、行進の歩幅を合わせるのに大苦勞した。しかし、この恐ろしい体操教師は、浜松中学時代最も心に残る人となったようだ。随筆「忘れ得ぬ人々」の第1回「伯父と旧師花井先生」に、若き日に最も強く精神的な影響を受けた人として、伯父石渡盛雄と花井楊五郎を回顧している。

短編「孤猿」では、花井陽五郎は次のように描写されている。

非常に厳格な教師で、その教師の前に立った時の緊張感は、恐怖という感覚でいまも私の軀の中に残っているほどである。年齢は当時既に五十を幾つか越し、教師の中では最古参で教頭の地位にあった。

五尺六、七寸ある逞しい軀と、白い口髭と、苦虫を噛みつぶしたような絶対に笑うということのない赤ら顔とを持っていた。

「孤猿」は、花井の俳号である。彼は、在職31年の歴史的な名物教師であった。